



週に1回、長女のナオミさんの車で買い物に出掛ける。北穂高にあるブラジルの雑貨店で日用品をまとめ買い。



Episódio 2

エピソード
時代

青年期を迎え、あてもない日々を送っていた盛達さんは、ある新聞広告を目にする。——南米移住者募集——。

戦後日本は、614万人の旧植民地からの引き揚げ者と8、000万人の自然増により、過剰人口が発生していた。そして、その解決手段の一つとして海外移民を奨励していた。

「何とかして今の状況を抜け出したい」。盛達さんはトランクを片手に、新天地へと向かった。

サンパウロに入り、最初の仕事は、露天でのバナナ売りだった。

まず、覚えた言葉は「ボンジュール(おはよう)」、「ウン、ドイス、トレス(1、2、3)」。そして次に覚えたのは「ゲタプッタ! (ろくでなし)」という言葉だった。悪い言葉とは知っていたが、生き抜くために必要な言葉だった。

1年ほど働いて、その後は日雇いの仕事を中心に何でもやった。

当時、移住者のほとんどは家族移住で、盛達さんのような縁故のない単身移住者はわずかだった。

それでも、現地では5人の単身移住者と知り合いになり、同じ境遇を生きる者同士、意気投合した。

しかし、そんな友人たちも数年しないうちに次々と病んでいった。

1人は精神障害を引き起こし帰国。1人は肺病を患い病死。そして、残りの3人は、自らの命を絶った。

結局、知り合った友人すべてが、盛達さんの前から姿を消していった。

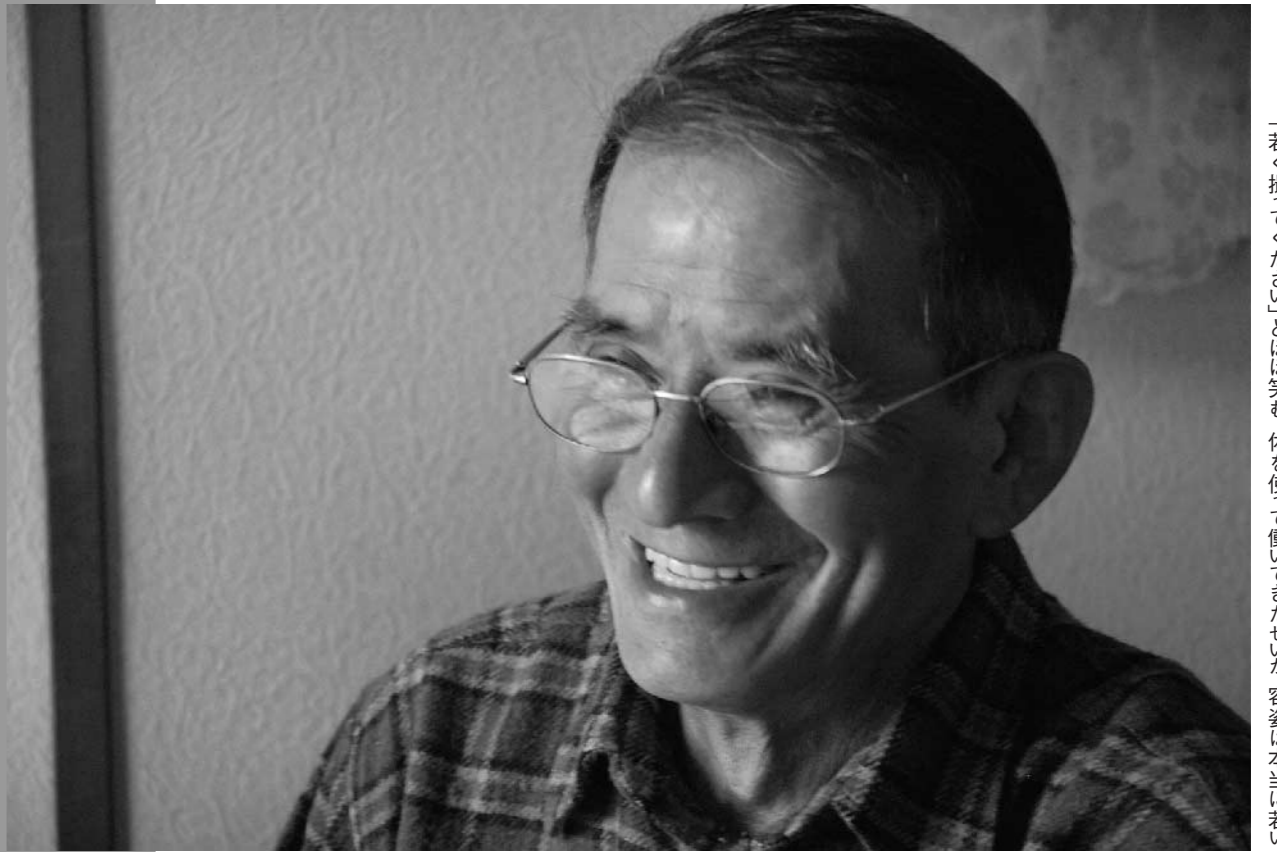
自分の番は、いつだろう——。

盛達さんはいつしかそう考えるようになっていた。



妻の豊子さん(68)と孫のサユリちゃん(11カ月)。

A história do senhor Kaneshi



「若く振ってください」とはほ笑む。体を使って働いてきたせいか、容姿は本当に若い。

日系移民1世の回顧録

カネシジいちゃんの昔話

兼次 盛達さん 69歳

Kaneshi Seitatsu

那覇市→サンパウロ州→豊科

1959年10月、ブラジル・サントス港に向け1隻の移民船が出港した。船の名前は「あるぜんちな丸」。戦後の移民輸送を象徴する大型船である。白い船体が岸壁をゆつくりと離れると、2、700人の乗客の多くは、棧橋を埋め尽くした人たちに手を振った。そしてその船には兼次盛達さんの姿もあった。

この瞬間から、盛達さんの長い旅が始まることになる。

焼け跡から

盛達さんは、1937年10月、兼次家の三男として沖縄県那覇市で生まれた。同年は盧溝橋事件が勃発するなど、日本が軍国主義に傾いていった時代である。

1944年10月、盛達さん7歳、国民学校1年の時のこと。

本土空襲に先駆けてアメリカ軍の激しい空襲が沖縄を襲った。戦火をくぐり抜け、父に抱かれて墓場の中や那覇から80^キ離れた国頭くにがみの山へと逃げ込んだ。まちは1週間燃え続けた。

警防団長だった父と母は戦争が原因で亡くなった。盛達さんは戦後の混乱の中、時にはネズミやヘビを食べ、生き抜いた。

豊子さん

サンパウロ市から南西に50^キほど行くくと、日系人が多く暮らす町、モジダス・クルーゼスがある。そこに豊子さんの実家があった。

豊子さんは「植民地」と呼ばれる日系農場で生まれ育った。植民地とは、雇用農として働くことを嫌った戦前移民が独立して形成した地区である。地域には日本人会ができ、日本人学校